

「風よ／日ざしよ／遠いあの人に／この祈りを伝えてください／私からとは伝えなくていいから／そんなことはどうだっていいから／ただ険しい道に行くあの人を／この祈りが包み／暖め、力づけるよう／伝えてください／あなたは一人ぼっちじゃないと（略）」。光原百合さんの詩です。このように、自分の欲を脱ぎ捨てて相手のことを祈れたら、どれだけ素晴らしいだろうかと思わされます。しかし、「私からとは伝えなくていいから…」と簡単には割り切れない感情もあります。とりわけ自分が良いと感じている行いについては、誰かに見られたいし、知っていて欲しいし、あわよくば褒められたいという気持ちが、抑え難く生じてくるようにも思えます。

本日の箇所には、ユダヤ社会の律法を解釈して教えていた、律法学者とファリサイ派の人々が登場します。イエスは、彼らの行いが「すべて人に見せるためである」ことを批判しました。彼らは、神の掟（律法）を預かる「モーセの座に着いている」こと、すなわち他の人々とは格が違うことを誇りとし、また周囲からもそう見られようとすることに心捕らわれていました（5～7節）。それ故、彼らは人々を問い正すことはあっても、自分達が問い正されることを避けています（22:46）。自分達の権威が、すなわち存在価値が失墜することを恐れていたからです。その恐れを覆い隠すように、立派な行いを「すべて人に見せ」、必死に自分の存在価値を守ろうとする彼らの姿が浮き彫りにされています。また、そのような自己保身への捕らわれは、律法が求める隣人への愛をないがしろにしていきました（4節）。そんな彼らに対してイエスは、あなたがたの師は、父は、教師は、キリストなる神だけであると宣言し、そこに関心を向けるよう促しました。「人に見せるため」ではなく、彼らの全ての行いをご存知（お見通し）である神にこそ目を向け、その一番偉い御方を前に「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」ようになるためです。

毎朝5時、牧師館の郵便ポストに新聞を配達して下さる男性は、いつも、薄暗闇の中に灯る教会の十字架塔に手を合わせてから帰られます。「私が届けました」と周囲に知られないまま投函される新聞。でも、神様だけはそのことをちゃんと知っておられる…そんな神聖な世界を垣間見る思いがしました。「インマヌエル【神は我々と共におられるの意味】」（1:23）としてお生まれになったイエスは最後に再び告げられます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（28:20）、あなたは一人ぼっちじゃないと。この方こそが、我が師、我が父、我が教師として私達を導き、教え、正しながら、私達の全てを知り続けていて下さいます。

（文責：望月達朗牧師）

